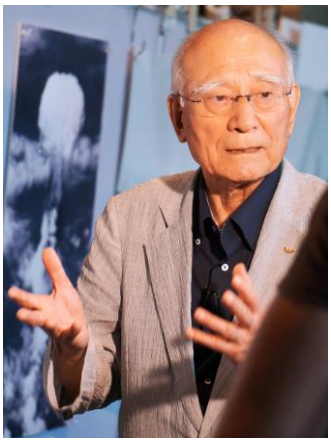
Footprint
フットプリント
写真資料調査部会発行
H28.9.01
2016年
第22号

今年も多くの方を迎え「長崎原爆写真展」終了

今年も原爆写真展を滞りなく終了することができた。関係各位に深く御礼申し上げる。開催直前「黒こげの少年」姉妹との奇跡的対面が報道されたため、来場者には関連写真の前に佇む人が多かったようだ。昨年は米国国立公文書館から持ち帰った写真の中に、自宅と思しき焼け跡に立ちつくす「少女と祖母」の姿があった。報道記者の手で当時六歳の少女を探し当て、写真と本人が対面するという劇的シーンに出会った。また、焦土と化した焼け跡にポツンと建つ一軒のバラックを指差して「これは自分の家だ」と名乗る老婦人の出現に、生き残った被爆者の生き様を垣間見る思いがした。原爆写真は被爆の実像を伝承するだけでなく、核時代を生きる私たちに未来への指標を示唆する効果があるように思われる。『核兵器は人類と共存できない』。被爆者の声に耳を傾ける必要はないのか。「黒こげの少年」から学ぶことは多い。

（部会長　深堀好敏）


当時の様子を話す深堀部会長

「黒こげの少年」写真を説明する丸田さん

北九州市「ながさき原爆展」に参加して

本年度の県外原爆展は、主催北九州市、共催長崎市、協力（公財）長崎平和推進協会として「ながさき原爆展」が7月24日から8月31日まで開催された。会場は市内の市立埋蔵文化財センター。所在地の北区金田は、戦前の小倉造兵廠の外縁にあたる地域で、現在は団地の立ち並ぶ近代的な市街地となっている。

広島に次ぐ二発目の原爆の第一目標は小倉（当時）市街地であり、天候等の事情から第二目標の長崎市に投下された経緯はよく知られている。北九州市では、いわば「身代わり」となった長崎市との意識を共有し、平和の尊さを継承するため、北区勝山公園に「平和祈念碑」が作られ、毎年8月9日には市長参列のもと平和祈念式が挙行されている。この埋蔵文化財センターの中に2006年、戦時資料展示コーナーが設けられ、軍都小倉の成り立ちや、戦時下の市民生活等が写真や実物資料で紹介されている。また一角には長崎原爆資料館から貸与された被爆瓦や遺品等も常設展示されている。

今回、これらに加え、山端庸介撮影の写真14点と被爆者の絵十数点が展示された。夏休み期間中とあって、来館者の大半は低学年児童とその保護者であったが、見慣れた廃墟の写真と違い、現代の報道写真に比肩する山端写真の生々しさには、一様に驚きを隠せない様子であった。特に電車から投げ出された乗客の遺体の写真の前では、足を止め画面を見つめる姿が目立った。

会場の北九州市立埋蔵文化財センター

ただ少し気になったのは、埋蔵文化財センターの中に戦時資料展示コーナーがあることを、一般市民がどの程度認知しているかということだ。どちらも北九州市の歴史の一齣であり、あえて区別する必要はないのだが、古代の出土品や中・近世の陶磁器類等と戦時資料はかなりイメージが異なる。私の印象では、大半の来館者の目的は、館本来の展示物である埋蔵資料と感じられた。ともあれ、長崎原爆資料館に匹敵する規模の施設であり、北九州市の今後の平和への取り組みとともに、設備、内容の充実を願ってやまない。

（松田　斉）

会場での説明風景

写真「黒こげの少年」と出会って

「昨年 7 月に写真と出会い、今年 6 月にこれまでの経緯について深堀さんと記者会見をしてホッとしました。その後 8 月 9 日までは何もないと思っていたんです。まさか、こんなに反響があるとは…」

今年の原爆関連の話題の中心となった、長崎原爆投下翌日に撮影された 1 枚の写真についてお話を伺った。

県立長崎西高の坂に立つ、西川美代子さん（79 歳）右、山口ケイさん（76 歳）左

これまで何度となく同じ写真を見ているのに、どうして気が付かなかったのでしょう…。西川美代子さん、山口ケイさん姉妹は、これまで気が付かなかったのは兄の死を真剣に受けとめてなかったせいではないかと自分を責めていた。せめて母が生きている間に分かっていたら…。

きっかけは、昨年の原爆写真展。「黒こげの少年」を見た瞬間、兄だと確信し、その写真をどうしても手元に置きたいと申し出たのだった。炭化した身体とは違い顔はきれいなままで、写真が大きかったこともあり、右頬からあごにかけての表情が、優しい兄そのものに見えたという。

姉妹の家族は、父 谷崎己之作（昭和41年69歳で没）、母 スヨ（平成16年101歳で没）に子どもは男5人、女5人の12人。写真の少年は三男の昭治（被爆当時13歳）だという。

西彼杵郡瀬戸町に住み、己之作は腕のいい技術屋で、設備工事を請け負っていた。教員をしていた兄2人は徴兵され戦地へ赴いた。今回、鑑定に使用された写真は昭和17年春頃、出征中の兄に送るため、地元の森写真館に依頼して撮影したもの。「私が泣き止まないので、父が抱っこして脇の方で撮影を見ていたのです。今でもその光景が目に焼き付いています。」とケイさんが当時の記憶を語った。

鑑定に使用された家族写真

左端の昭治は、声を荒げる事もなく3人の妹たちにからかわれてもニコニコと笑っている静かで温和な性格。瓊浦中学校への進学は近所でひとつ上の先輩の影響だったという。

入学当初の下宿は、竹の久保町一二〇番地、大家は深堀さん。復元地図で確認すると、現在の活水中・高等学校下ハンバーガーショップ付近になる。

しかし、4か月後の8月、下宿は大家ごと岡町へ引っ越した。転居先の岡町の番地を知るすべはないが、戦後、己之作が語った「文明堂の工場近くの井戸のある場所」だけが手がかりである。昭治は長崎の地理に疎いとはいえ、岡町からの通学路として可能性が高いのは、松山町から築橋を渡り、浦上川沿いに鎮西中学校下を通り、瓊浦中学校へ行くルートである。

昭和20年8月6日、広島への新型爆弾投下を知り、危険を感じた己之作は、どんなことをしてでも昭治を瀬戸に連れて帰ろうと8日、下宿を訪ねた。しかし昭治は「9日は英語の試験があり、受けないと落第する。」と泣いて訴えたという。

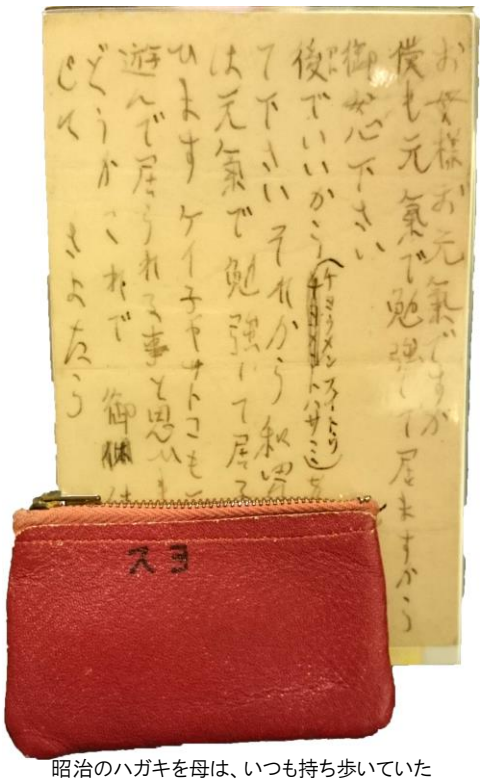
己之作はその日は連れて帰ることをあきらめ、翌日、試験が終わったら帰ると約束させた。別れる前に、水筒の口から水が漏るというので修繕をしてやった。翌9日、長崎に原爆投下。己之作は10日早朝、約50キロの道のりを歩いて岡町にたどり着く。下宿の跡には昭治の水筒とこうもり傘が残っていた。8日に修繕した跡が確認でき「水筒がここにあるのなら、近くにいるはず」と下宿跡を中心に近辺を3日間探し回る。しかし、結局見つけ出すことはできなかった。岡町の死者を火葬している場に出会い、その骨の一部を譲り受け帰宅した。

2002（平成 14）年 8 月寄贈　長崎原爆資料館蔵　「水筒」

昭治を連れて帰れなかったとの後悔からか、己之作は戦後一切その事を口にしなかったという。己之作は毎年夏になると全身に吹き出ものができ、通院を繰り返した。医師からは被爆の影響だと言われた。

昭治の遺品の水筒とこうもり傘は、遺骨代わりに墓に納めたが、57年目に取り出してみると傘の骨はボロボロになり、原形をとどめていなかった。このままでは保存できないと考え、残った水筒を同年長崎原爆資料館に寄贈した。

今手元にあるのは、竹の久保の下宿から母と四男の和男宛に送られた一枚のハガキだ。



昭治のハガキを母は、いつも持ち歩いていた

ハガキには、

『お母様お元氣ですか　僕も元氣で勉強して居ますから御安心下さい。後でいいから（チョウメン、スイトウ、ハサミ）を持って来て下さい。それから和男やミヨ子は元氣で勉強して居る事と思ひます。ケイ子やサトコも元氣で遊んで居られる事と思ひます。どうかこれで御体を御大じに　さよなら』

と書かれている。

母親の没後、遺品を整理した際、いつも持ち歩いていた赤い小銭入れの中に、このハガキが四つ折りにして入っているのを見つけた。母の悲しむ姿を見ていた姉妹は、昭治と思われる写真を見せられなかったことが残念だという。

山端氏から送られてきた写真

「写真を見ると涙が出るんです。兄の死を今、真剣に受けとめているんです。周りは大変な状況なんでしょうが、ありがたいんです。亡くなって悲しくはあるんですが、こんなにきれいに撮ってもらって…。」

信心深い家族は、これまで祥月命日には欠かさず長崎の東本願寺に参っていた。同寺に保管されている無縁死没者の遺骨の中に「もしかしたら、この中に昭治の骨が…。」と考えたこともあったという。

今年、昭治の法名と小さくした写真を京都の東本願寺に納めることができた。姿を確認できた年、初盆にあたるということで灯篭もあげてもらうという。

本当に、昨年出会えて良かった…、姉妹は愛おしそうに写真を見つめた。

平成15年、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の開館に際し、旧制瓊浦中学校同窓会では同校死没者の遺影登録を企画し、遺族に死亡時の情報提供を求めた。昭治の親戚で、瀬戸町から同時に瓊浦中学に進学した堀口直人の遺族から寄せられた回答の中に「当日試験終了後、谷崎（昭治）君と松島出身で氏名不詳の友人と大橋で落ち合い、三人で瀬戸町に帰ることにしていたらしい」という主旨の記述があった。松島出身の友人は被爆死したが、同じ下宿の生存者が、当人がそう語っていたのを記憶していたという。昭治と堀口直人は下宿も一緒であり、水筒が下宿跡で発見されたことを考えると、二人で一旦下宿に戻り、待ち合わせ場所の大橋へ行く途中で被爆したとも思えるが、それ以上のことは分からない。

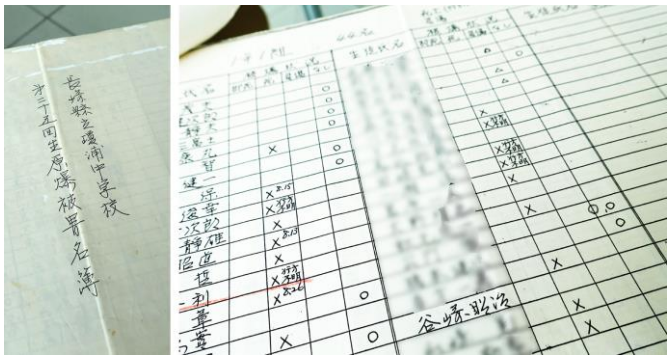
瓊浦中に立つクスノキを目印に、母は昭治の下宿を訪ねていたという

最後に、今回の鑑定結果について聞いてみた。

姉妹は、写真を手元に置きたいとの一心で、その後の鑑定などとは思いもよらなかったと言う。もし「別人」だという結果が出ても、姉妹にとって「黒こげの少年」は兄の昭治だとしか思えなかった。写真には、優しい兄の面影が残っていた。

しかし今は、鑑定結果にホッとしているという。

（調　仁美）



瓊浦中学校一年生は集合写真もなく、生き残った教諭が戦後作成した名簿が残るだけである。

写真「黒こげの少年」と旧制瓊浦中学校

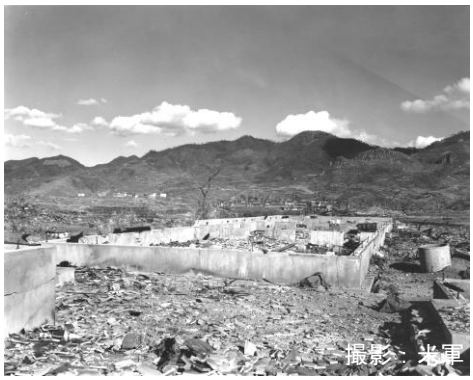
山端庸介氏が原爆投下翌日に撮影した「黒こげの少年」。この被写体の人物が、旧制瓊浦中学校（現県立長崎西高校）一年生谷崎昭治君である可能性が高い、との専門家の鑑定結果がこのほど明らかになった。

私は谷崎君と同じく、昭和二十（一九四五）年四月瓊浦中学校に入学した。西彼杵郡瀬戸町（当時）出身の彼とはクラスも別で面識はなかった。とはいえ当時の競争入試を突破し、『県立中学合格』という人生で初めて味わう喜びを共にして、同じ学舎で希望に燃えた中学生生活を送っていた学友であった。

しかし既に戦争末期、上級生は学徒動員で学校には殆ど姿を見せず、私たち一年生も授業の合間に校庭での芋作りの農作業や、米軍の本土上陸に備えて甑岩での塹壕堀り作業に明け暮れていた。加えて空からの米軍機の来襲に怯えた日々を送るといった、現代の若者には想像もつかない異常な中学生生活であった。

以来四か月、運命の八月九日、私たち瓊浦中学校一年生は一学期の期末試験最後の一科目英語のテストの日で（注：当時敵性語だった英語は中学校では正課だった）午前十時頃テストを終え、各クラス数人ずつ掃除当番を残して大部分が学校を後にしたのであった。そして迎えた悪魔の十一時二分、彼らのうち早い者は帰り着いた自宅や下宿で、或いは帰宅途中の路上や市内電車の中で、はたまた掃除当番で残っていた者は学校での業火の一閃を浴び、一年生約三百人中三分の一を上回る、百十四人が非業の死を遂げたのであった。

中には、一家全滅の悲運にあった者や遺体さえも見つからなかった者も少なくない。その実態は今日でも明らかになっていない部分が多いのである。あの日の朝「いってまいります」と言って家を出たまま、七十一年たった今もまだ家に帰っていないのだ。「黒こげの少年」が谷崎君であれば、彼はそのうちの一人であることに間違いない。



爆心地から約 600mに位置する瓊浦中学校

彼らにとって僅か四か月の中学生生活で、原爆のために夢も希望も無残に打ち砕かれたのであった。

瓊浦中学校全体では、教師十五人、生徒約一千二百人中四百人、実に三人に一人が夏雲の彼方へ逝きて、再び学びの庭に戻ることはなかった。

当時、長崎市内の中学校の中でわが瓊浦中学校が原爆で最大の犠牲者を出すという悲運に見舞われたのは、学校が爆心地に近かったこと、生徒の自宅や下宿が市北部に多かったこと、それに加えて上級生の学徒動員先の兵器工場が浦上地区に集中していたこと等が主な理由であった。

旧制中学生といえば、十二～三歳から十六～七歳、谷崎君と同じ最下級の一年生であった者でさえ、今日まで生きながらえた者は今や後期高齢者の仲間入りをして久しい。しかし、死んでいった彼らは、少年の姿のまま私たちの心の中に生き続けている。

生き残りたる我ら、
故・永井隆博士の
「子供たちよ　あの日、死んでいった友を忘れるな！」
の遺訓を胸に、残された時間を、あの日の記憶の継承に微力を尽くすことが、亡き谷崎君への最大の供養になると痛感している次第である。

（丸田　和男）

倒れたクスノキが坂を覆う　撮影：松本栄一